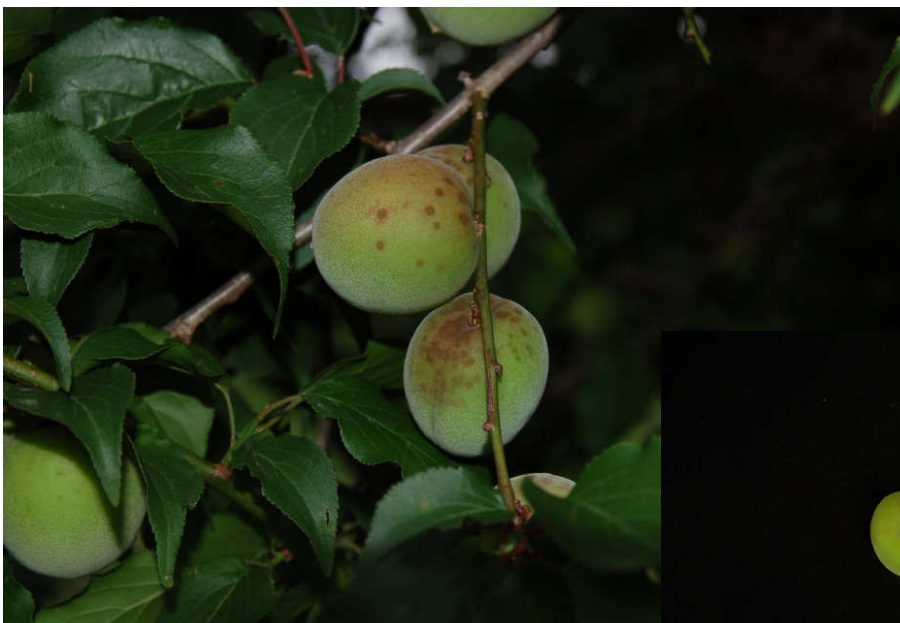


一般社団法人 和歌山県植物防疫協会

情 報

第 9 7 号

2 0 1 4 . 2



【ウメの黒星病とすす斑病の発病果実（左：黒星病、右：すす斑病）】

目 次

食酢および重曹のウメ各種病害に対する防除効果〔県うめ研究所〕	2
モモせん孔細菌病の発生と防除対策〔県かき・もも研究所〕	4
エンドウにおける灰色かび病の薬剤感受性実態 ～効率的な薬剤防除を行うために～〔県農業試験場〕	6
平成25年度農薬防除技術確認圃成績検討会概評〔県農業試験場・果樹試験場〕	8
【事務局からのお知らせ】	9

食酢および重曹のウメ各種病害に対する防除効果

果樹試験場うめ研究所 武田知明

1. はじめに

食酢および重曹は特定農薬（特定防除資材）に指定されており、近年消費者からの関心が高い有機農産物の日本農林規格（有機 JAS）でも使用可能な資材ですが、ウメの病害に対する防除効果については分かっていません。そこで今回は、食酢と重曹の黒星病およびすす斑病に対する防除効果について検討しました。

2. 方法

2011 年と 2012 年に、市販の食酢（穀物酢、酸度 4.2%）と重曹を 500 倍に希釈したものを供試して試験を行いました。試験区は、食酢のみを散布した食酢区、重曹のみを散布した重曹区、食酢および重曹の使用により県防除暦例から化学合成農薬の散布回数を半減した半減区、平成 23 年度の県の防除暦例どおり散布した慣行区をそれぞれ設け、表 1 のとおり供試薬剤を散布しました。

調査は 5 月上旬以降定期的に 1 樹あたり 100 果（100 果に満たない場合は全着果果実）について程度別に発病を調査し、黒星病およびすす斑病の発病果率および発病度を算出しました。試験は 1 区 1 樹 3 反復で行いました。

3. 結果

2011 年は、4 月上旬から 5 月中旬にかけては平年並みの降雨でしたが、5 月下旬から 6 月中旬にかけて極めて多雨に経過し（表 2）、2012 年は、4 月上旬から下旬にかけての降雨日数は多く、5 月上旬から 6 月中旬にかけては少雨に経過し、6 月下旬に雨が多くなりました（表 3）。

【黒星病に対する防除効果】

2011 年の試験では、無散布区の発病果率は 88.3%、発病度は 57.8 で多発生となり、食酢区と重曹区は半減区および慣行区には

劣りましたが防除価 90 以上の高い防除効果が認められました。2012 年は、無散布区の発病果率は 91.4%、発病度は 63.2 で多発生となり、食酢区は防除価 38.2 と効果が低く、重曹区は防除価 64.6 と効果が認められましたが、その程度は低く、半減区は防除価 84.4 と高い効果が認められましたが、慣行区には及びませんでした（図 1）。

【すす斑病に対する防除効果】

2011 年は、5 月下旬以降に極めて多雨に経過したことから、無散布区の発病果率は 100%、発病度は 58.5 で甚発生となりました。食酢区は防除価 30.3 と効果が低く、重曹区は防除価 64.1 と効果が認められましたが、その程度は低く、半減区と慣行区は、防除価 80 以上の高い効果が認められました。2012 年は、5 月上旬から 6 月中旬に雨が少なかったことから、無散布区の発病果率は 16.7%、発病度は 4.0% で少発生となりました。食酢区は防除価 35.6 と効果が低く、重曹区は防除価 79.4 と効果が認められました。半減区と慣行区は防除価 100 と高い効果が認められました（図 2）。

4. 考察

2 年間の試験の結果、食酢 500 倍散布の黒星病およびすす斑病に対する効果は低く、実用性は低いと考えられました。重曹の 500 倍散布は両病害に対してある程度の効果が認められましたが、化学合成農薬のみを使用した慣行区よりも効果が劣りました。半減区の防除効果は慣行区よりやや劣るものの両病害に対して高い効果が認められました。

食酢区および重曹区の黒星病に対する防除効果は、2011 年よりも 2012 年の試験で低く、これについては、2012 年は伝染源となる枝病斑が多く菌密度が高かったため、食酢や重曹の効果が発揮されにくかったと考えられます。一方で、化学農薬のみを使

用した慣行区では、いずれの年も高い防除効果が認められました。これらのことから、食酢と重曹は化学農薬に比べて効果が安定しにくく、条件によっては病害の発病を抑えられないと考えられます

星病とすす斑病に対してある程度の防除効果があることが分かりました。しかし、化学農薬と比較すると効果が劣ったことや、年によって効果に差があったことなどから、慣行栽培での使用には向かないと考えられます。今後は、重曹の効果的な使用方法についてさらに検討し、ウメの有機栽培における防除体系の確立に向けて努力したいと考えます。

5. おわりに

今回の試験で、重曹の500倍散布は、黒

表1 2011年および2012年における試験区の構成と散布日、散布薬剤

区	試験年度		散布日			
	2011年	3/29	4/14	4/26	5/13	5/25
	2012年	4/10	4/25	5/10	5/22	6/4
食酢区	食酢	食酢	食酢	食酢	食酢	食酢
重曹区	重曹	重曹	重曹	重曹	重曹	重曹
半減区	ヘルコート	食酢	イオUF	重曹	スコア	スコア
慣行区	ヘルコート	ストロビー	イオUF	バイコラル	スコア	スコア
無散布区	—	—	—	—	—	—

(注)食酢:食酢500倍、重曹:重曹500倍
 ヘルコート:ヘルコート水和剤 2,000倍 イオUF:イオUFアンプル 500倍
 ストロビー:ストロビードライアンプル 2,000倍 バイコラル:バイコラル水和剤 2,000倍
 スコア:スコア顆粒水和剤3000倍
 ※バイコラル水和剤は登録が失効したため、ウメで使用できません。

表2 試験期間中の降雨状況(2011年)

月日	3/29-4/13	4/14-4/25	4/26-5/12	5/13-5/24	5/25-6/9	6/10-6/21
降水量(mm)	79.5	93	211	200	204	328
降雨日数	2	5	7	9	10	10

表3 試験期間中の降雨状況(2012年)

月日	4/10-4/24	4/25-5/9	5/10-5/21	5/22-6/3	6/4-6/7	6/8-6/14	6/15-6/21
降水量(mm)	78	45.5	16.5	16	8.5	37	247
降雨日数	9	8	4	1	1	3	5

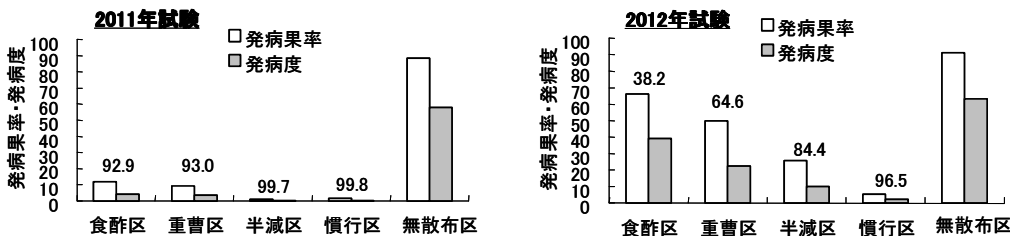


図1 黒星病に対する食酢および重曹の防除効果

(注)図中の数字は防除値を示す。調査日:2011年試験は6月22日、2012年試験は6月15日
 発病度 = $\sum(\text{指数} \times \text{発病果数}) \times 100 / (6 \times \text{調査果数})$
 指数 0: 病斑なし、1: 病斑が1~3個、2: 病斑が4~8個、4: 病斑が9~20個、6: 病斑が21個以上
 防除値 = $100 - (\text{試験区の発病度} / \text{無散布区の発病度}) \times 100$

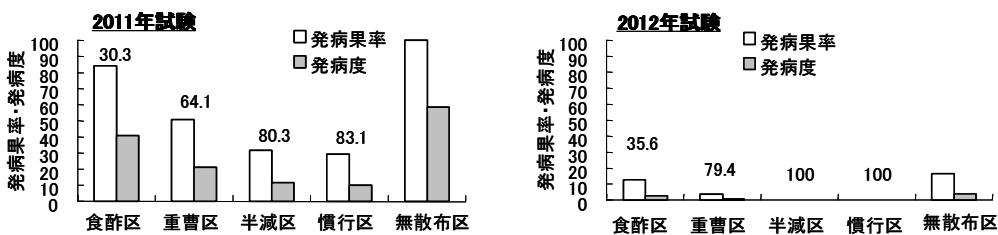


図2 すず斑病に対する食酢および重曹の防除効果

(注)図中の数字は防除値を示す。調査日:2011年、2012年試験とも6月22日
 発病度 = $\sum(\text{指数} \times \text{発病果数}) \times 100 / (6 \times \text{調査果数})$
 指数 0: 病斑なし、1: わずかに発病が認められる、3: 1見して発病が認められるが、果面の1/2以下
 6: 果面の1/2以上に発病が認められる。
 防除値 = $100 - (\text{試験区の発病度} / \text{無散布区の発病度}) \times 100$

モモせん孔細菌病の発生と防除対策

和歌山県果樹試験場かき・もも研究所 間佐古将則

1. はじめに

2013年は、春先から枝枯症状が多く、その枝から高率にモモせん孔細菌病原菌を確認したため9年ぶりの多発が心配されましたが、ほぼ平年並でした。本病害は、強風雨による影響が大きく、本年の防除対策を考える上で、前年の気象条件や発病状況を把握することが重要です。

ここでは、枝での病徴、2013年の発病状況および防除対策について紹介します。

2. 枝での病徴と発生生態

枝では、水浸状にへこんだ小病斑を生じ、しだいに紡錘状に広がり褐色や紫赤色を呈します。越冬枝上の病斑を春型枝病斑（スプリングキャンカー）と呼びます。これは、節間部、芽（節）の付近、枝先端で発芽期から活動し、第一次伝染源として病原菌が溢出し、病徴は落花直後～2週間後に現れます。枝病斑の症状が激しい場合、病斑上の芽が枯死します（写真1）。

また、枝病斑が多くみられた年は発病葉が多発する傾向があります（図1）。

3. 2013年の発病状況

2013年春先に枝での発病が多かった原因として、前年秋期の強風雨の日数が多かったこと、2013年3月の気温が高かったことが考えられます。4月以降は、強風を伴う雨の日が少なかつたことで、7月中旬には、発病果率9.2%（平年8.8%）、発病園率70%（平年64%）と平年並に抑えられました。しかし、発病葉率は16.3%（平年7.8%）と高かったため、2014年も多発する心配が残ります（表1）。

10年前の2004年は、4月と5月に発病を助長する強風雨数（最大風速10m/sかつ降水量5mm/日以上）が7日と多く、果実の被害が多発しました。その後、防除の徹底もあり2005年は抑えられましたが2006年再度多発しました。これに比べ2012年と2013年の4月、5月の強風雨日数は、幸い2日で落ち着きました（表2）。

4. 防除対策

本病害は、多発条件下では薬剤のみによる防除に限界があります。そこで、防風対策、発病枝の剪除、早めの袋かけ等と薬剤散布を組み合わせた総合的防除対策が重要です。

モモ樹体に風速を変えながら菌液接種した試験では、風速10m/s以上で発病葉が増加したことから、防風ネット設置の目安は、風速を常に10m/s以下に抑えることが重要と考えます。

なお、風速10m/sまでの風の場合、ネットの高さの約3～4倍の距離まで、風速を約30%弱めることができます。1999年の多発年に和歌山県桃研究協議会において防風ネット設置園（高さ：3.1～4.5m、網目：4mm）と無設置園の発病果率を比較した結果、無設置園の発病果率24.7%に対し、防風ネット設置園では、8.5%（1～3列目の平均）で、約3分の1に軽減されました（データ省略）。

薬剤防除の1つとして抗生物質剤があり、展葉後の生育期に10～14日間隔で使用されています。ただし、無散布での発病果率が20%以下程度の条件であれば効果は認められますが、無散布で発病果率約90%だった2004年のような甚発生では、効果がほとんど認められませんでした。

そのため、越冬病斑からの初期伝染を防ぐため、春先に感染が疑われる枝および発病枝を徹底的に剪除し、ボルドー剤による秋期および春期（開花直前）の薬剤散布が重要です。

5. おわりに

2006年に基幹防除薬剤であったストレプトマイシン水和剤の収穫前日数の変更に伴い、生育期に使用可能な薬剤が限られ、薬剤のみで頼った防除では、多発した場合に防除効果が低下するため、防風施設の設置を推進していく必要があります。今後も高品質果実を安定生産するためにも、生育期の強風雨対策に加え、春先や秋期の温暖多雨に対しても更なる取り組みが必要と思われます。



写真1 発病枝における芽の枯死

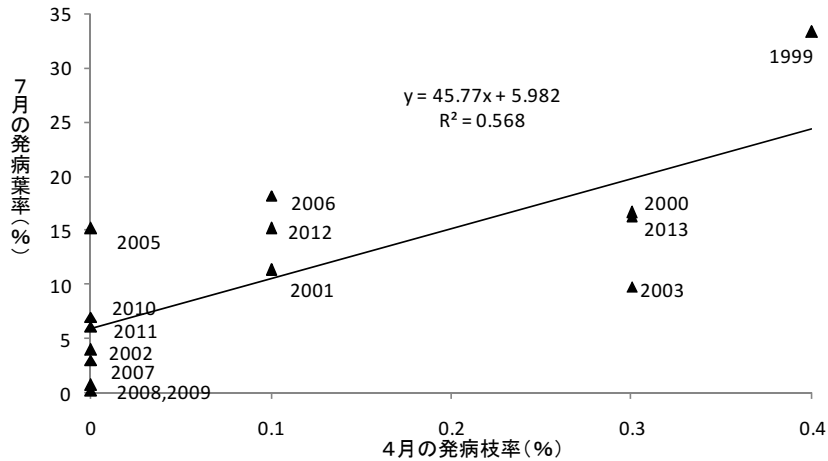


図1 モモせん孔細菌病の発病枝率(4月)と発病葉率(7月)の関係

表1 モモせん孔細菌病の発病園率、発病果率、発病葉率

	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	平年値
発病園率(%)	90	70	100	100	90	10	10	40	60	70	70	64
発病果率(%)	5.6	41.1	6.8	20.2	0.4	0.2	0.2	5.8	2.2	5.8	9.2	8.8
発病葉率(%)	9.8	2.9	15.2	18.2	3	0.7	0.2	7	6.1	15.2	16.3	7.8

注) 調査ほ場数: 10園、調査時期: 7月中旬、平年値: 2003~2012年の平均値

表2 4月中旬から5月下旬のモモ生育期における強風雨日の最大風速と降水量

月 旬	1998		1999		2003		2004		2005		2006		2010		2011	
	W	P	W	P	W	P	W	P	W	P	W	P	W	P	W	P
4 中	14.0	16.5	13.8	11.0	11.7	7.0	17.8	9.0	10.7	17.5	12.9	43.5				
	11.0	27.5							13.0	6.5						
4 下	10.9	18.5			15.3	32.0	11.6	6.5					10.8	12.5	12.5	25.5
															14.5	26.0
5 上	16.2	9.5	11.1	52.5	14.3	24.5	18.4	35.5	14.5	19.5	10.0	35.0				
	16.1	23.5					11.2	32.5								
5 中	14.8	16.5					18.1	55.5			11.1	8.0	10.9	22.5	13.0	21.0
	12.5	25.5					15.1	39.5					10.0	13.5		
5 下			15.4	29.0	13.2	20.0	15.2	7.5					14.7	10.5	13.5	153.5
			23.8	71.5											14.9	24.5
日数	7		4		4		7		3		3		4		5	

注) 和歌山地方気象台 和歌山市の気象データを用いた

せん孔細菌病の発病と相関の高い強風雨日の最大風速と降水量

(最大風速10m/sかつ降水量5mm/日以上)を示した。

W: 最大風速(m/s)、P: 降水量(mm/日)を示す。

強風雨日が2日以下の年(2000、2001、2002、2007、2008、2009、2012、2013)は記載せず。

エンドウにおける灰色かび病の薬剤感受性実態 ～効率的な薬剤防除を行うために～

和歌山県農業試験場環境部 岡本晃久

1. はじめに

野菜類の施設栽培では、低温期に湿度が高まり、灰色かび病が発生しやすく、薬剤散布回数が増加します。このため、耐性菌の発生により薬剤の防除効果が低下する事例が多く、施設栽培エンドウにおいても耐性菌の発生が懸念されました。そこで、数種殺菌剤に対するエンドウ灰色かび病菌の感受性について調査した結果を紹介します。

2. 薬剤添加培地を用いた感受性検定

(1) 供試菌株

平成22年3月にみなべ町、印南町、御坊市、日高川町のエンドウ栽培ハウス10ほ場で、罹病茎等を1ほ場あたり10試料採集、分離した灰色かび病菌を供試しました。

(2) 供試薬剤および検定方法

表1 供試薬剤と成分および検定濃度

薬剤名	有効成分	検定濃度
ゲッター水和剤 ※1	ジエフェカルブ	1ppm, 5ppm
	チオファネートメチル	4.2ppm, 21ppm
ロブラール水和剤	イプロジオン	1ppm, 10ppm
セイビアーフロアブル20 ※2	フルジオリニル	1ppm, 10ppm, 200ppm
カンタストライフロアブル	ホスカリト	1ppm, 5ppm

※1 ゲッター水和剤はジエフェカルブの濃度で検定を行った。

※2 カンタストライフロアブルは平成26年1月9日現在、さやえんどうに登録はあるが、うすいえんどう(豆類(未成熟)実えんどう)に登録がない。

①ゲッター水和剤、ロブラール水和剤、セイビアーフロアブル20

20℃で3日間培養した供試菌株を直径4mmのコルクボーラーで打ち抜いて菌そう片とし、表1の濃度となるように各薬剤を添加したPDA培地に置床しました。その後20℃で2日間培養し、菌糸伸長の有無を調査しました。

②カンタストライフロアブル

20℃で3日間培養、同条件で更に4日間BLB照射し孢子形成を促した供試菌株を直径4mmのコルクボーラーで打ち抜いて菌そう片とし、1mlの滅菌水を加えて10⁵個/ml程度となる孢子懸濁液を作成しました。この孢子懸濁液に直

径6mmのペーパーディスクを浸し、表1の濃度となるように薬剤を添加したPDA培地に置床した。20℃で7日培養し、菌糸伸長の有無を調査しました。

(3) 検定結果

ゲッター水和剤5ppm添加培地で菌糸伸長した菌株は10ほ場中9ほ場で認められ、6ほ場では50%以上となり、感受性低下菌が広く分布していると思われました(図1)。ロブラール水和剤では1ppm添加培地で菌糸伸長が認められたものの、10ppm添加培地で菌糸伸長する菌株は認められず、感受性の低下は比較的軽微であると思われました(図2)。セイビアーフロアブル20およびカンタストライフロアブルでは、薬剤添加培地で菌糸が伸長する菌株はみられず、感受性の低下は認められませんでした(データ省略)。

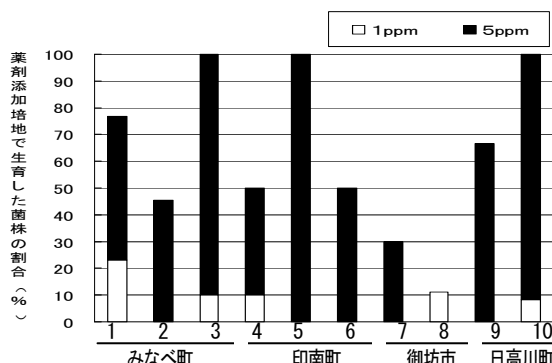


図1 灰色かび病菌のゲッター水和剤に対する薬剤感受性
注) 薬剤の濃度はジエフェカルブの成分による

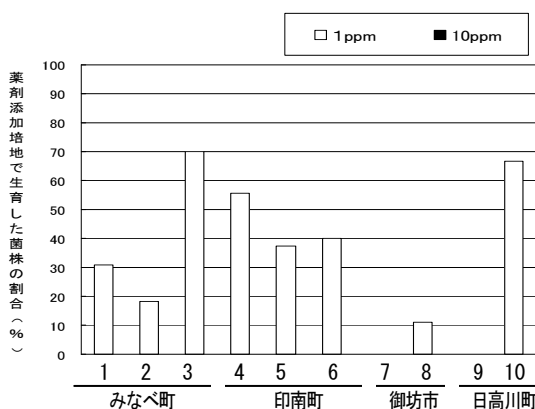


図2 灰色かび病菌のロブラール水和剤に対する薬剤感受性

3. キュウリ子葉を用いたゲッター水和剤感受性検定

培地上で感受性低下を確認した菌株を、実用濃度の薬液を滴下したキュウリ子葉に接種し、これらの菌株が薬剤耐性菌となり得るか調べました。

(1) 供試菌株

平成 22 年に日高地域のエンドウ圃場から分離した灰色かび病菌のうち、ゲッター水和剤をジエトフェンカルブの成分で 5 ppm となるよう添加した培地で生育した 55 菌株（感受性低下菌）、および 1 ppm 添加培地で生育しなかった 5 菌株（感受性菌）を供試しました。

(2) 供試薬剤および濃度

ゲッター水和剤 1000 倍

(3) 供試植物

9 cmポットで育苗した播種後 7 日のキュウリ子葉（品種：ずばり 163）を、1 菌株につき 5 株供試し、2 反復としました。

(4) 検定方法

供試菌株を 2 mm厚の PDA培地に置床し 20℃で 3 日間培養、同条件で更に 4 日間 B L B 照射下で孢子形成を促しました。その後直径 6 mm のコルクボーラーで菌そう片を打ち抜き、1/2 P D B（Potato Dextrose Broth 12g/L, Tween 20 0.01%）を 1 ml 加え、 10^7 個/ml 程度の孢子懸濁液を作成しました。キュウリの子葉表面に直径 6 mm のペーパーディスクを置き、孢子懸濁液 $0.5 \mu\text{l}$ を滴下しました。孢子懸濁液接種後はビニール袋で覆い人工気象室（20℃、12 時間日長）に静置しました。処理区は接種後 6、24、48 時間後に同一のペーパーディスク 1 枚あたり $50 \mu\text{l}$ の薬液を滴下しました。接種 72 時間後、ペーパーディスクと子葉が接する部位で病斑形成の有無を調査しました。

(5) 検定結果

感受性低下菌は薬剤滴下処理、無処理子葉ともにすべての接種葉に病斑を形成しました。これに対して感受性菌は、無処理子葉で病斑を形成しましたが、薬剤滴下処理子葉に病斑は形成しませんでした。このことから、感受性低下菌は、ほ場においても耐性菌となり得ると思われました（図 3）。

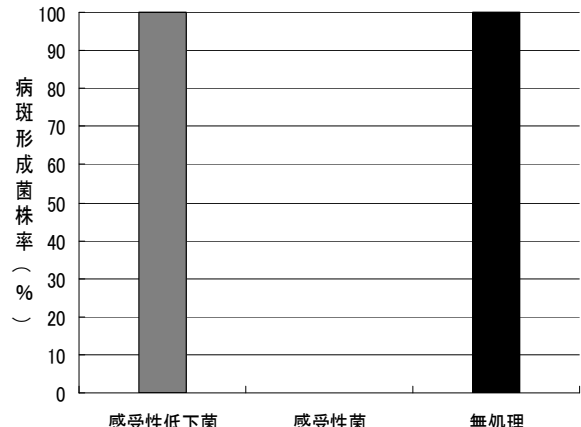


図 3 感受性低下菌および感受性菌接種キュウリ子葉へのゲッター水和剤が発病に及ぼす影響

4. おわりに

灰色かび病に限らず、作用機作の異なる薬剤によるローテーション散布が病害防除の基本です。今回検定を行った日高地域の施設栽培エンドウでは、ゲッター水和剤を灰色かび病に使用する際には防除効果に注意を払う必要があり、状況に応じて代替剤を選択することが望ましく、同時に、換気や循環扇により灰色かび病の発生を抑制する環境を整える等、耕種的防除を併せて行うことも重要です。

平成 25 年度 農業防除技術確認圃成績検討会概評

和歌山県農業試験場環境部 林恭弘

平成 25 年度の農業防除技術確認圃成績検討会が平成 25 年 11 月 27 日に開催されました。

その概要は以下のとおりです。

病害虫の調査方法は、作物と病害虫を組み合わせた農業技術確認圃調査方法に基づいて行っており、近年は平成 25 年 3 月に改訂を行っています。

－水稲の病害虫－

箱いり娘粒剤のいもち病、ウンカ類、コブノメイガ、紋枯病に対する防除試験では、いもち病、ウンカ類、コブノメイガについては対照区とほぼ同等の効果でした。紋枯病は効果が認められましたが、対照薬剤に適用がありませんでした。薬害もなく普及性があると考えられました。

ルーチントレス箱粒剤のいもち病、ウンカ類、コブノメイガに対する防除試験では、いもち病については対照区とほぼ同等の効果でした。ウンカ類とコブノメイガは試験区、対照区とも発生が認められませんでした。薬害もなく普及性があると考えられました。

嵐プリンスチェス箱粒剤のいもち病、紋枯病、イネミズゾウムシ、ウンカ類に対する防除試験では、いもち病とイネミズゾウムシについては対照区とほぼ同等の効果でした。紋枯病とウンカ類は試験区、対照区とも発生が認められませんでした。薬害もなく普及性があると考えられました。

－野菜の病害虫－

キュウリ:ベネセット水和剤(カンパネラ水和剤)のべと病に対する防除試験では、対照薬剤とほぼ同等効果が認められました。薬剤散布による果実への汚れ、薬害もなく、ローテーション散布の一剤として普及性があると考えられました。

トマト:ベネセット水和剤(カンパネラ水和剤)の疫病に対する防除試験では、対照薬剤ともに発生が認められずデータ不足のため判定不能という結果でした。しかし、薬害もなくローテーション散布の一剤として普及性があると考えられました。

ミニトマト:トマトサビダニに対するガードホープ液剤(アオバ液剤代替)は対照薬剤と同等で、無処理に比べて防除効果が認められました。トマトサビダニにはスポット発生することが多く、部分防除で対応しています。灌中処理はマルハナバチへの影響が少ない点は評価が高いのですが、本薬剤の登録内容である生育期間中 1 回の灌中処理ではスポット処理への対応が困難です。

－水稲の除草剤－

ポッシブル 1 キロ粒剤は 1 地域で試験が実施され、薬害もなく除草効果の高いことが確認されました。

月光 1 キロ粒剤は 3 地域で試験が実施され、わずかに後期発生の 1 年生雑草が認められましたが、薬害もなく除草効果の高いことが確認されました。

キクンジャーZフロアブルは 2 地域で試験が実施され、薬害もなく除草効果の高いことが確認されました。

ビッグシュア Z1 キロ粒剤は 2 地域で試験が実施され、薬害もなく除草効果の高いことが確認されました。

ナギナタ 1 キロ粒剤は 2 地域で試験が実施され、わずかに後期発生の 1 年生雑草が認められましたが、薬害もなく除草効果の高いことが確認されました。

一果樹の病害虫一

(1) かんきつ類

ファンタジスタ顆粒水和剤は花と果実の灰色かび病、葉と果実のそうか病に対して、対照のストロビードライフロアブルとほぼ同等の防除効果が認められました。

コルト顆粒水和剤はチャノキイロアザミウマに対して、対照のモスピラン顆粒水溶剤とほぼ同等の防除効果が認められました。

いずれの剤も薬害の発生は認められませんでした。

(2) もも

フルーツセイバーの2回散布は花と果実の灰星病に対して、対照のストロビードライフロアブルとベルコート水和剤の各1回散布とほぼ同等の防除効果が認められました。

コンフューザーMM とナシヒメコンの処理区はナシヒメシンクイによる新梢の芯折れ被害が無処理区より少なかったのですが、コンフューザーMMのみの処理区と比べてほぼ同等の被害でした。モモハモグリガに対しては、被害の発生がなく効果の判定ができませんでした。

各区に設置したフェロモントラップの調査によると、両処理区においてナシヒメシンクイ、モモハモグリガともに無処理区と比べて誘殺数が非常に少なく、高い交信攪乱効果がみられました。

いずれの剤も薬害の発生は認められませんでした。

○前号でお知らせした平成25年度植物防疫協会実地研修会を10月17日(木) 県果樹試験場で開催しました。

当日、仁木果樹試験場長の挨拶の後、県農業環境・鳥獣害対策室小谷副主査から「農薬を巡る最近の情勢について」、県果樹試験場井沼副主査研究員と同貴志副主査研究員から「常緑果樹の主要病害虫の発生と防除対策について」をそれぞれご講演戴きました。

また、病害虫の実物鑑定を実施し、皆さん熱心に鑑定され、正解発表では歓声とため息が会場にこだましていました。

また、当初の予定よりも多い50名を超える方々が参加くださり、果樹試験場の職員の方にコピーをお願いするなど、皆様にご協力戴きました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



○平成26年2月6日、一般社団法人和歌山県植物防疫協会平成25年度第3回理事会を和歌山市の県民文化会館408号室で開催しました。

議案は、
第1号議案 平成26年度事業計画及び収支
予算案承認の件
第2号議案 平成26年度通常総会招集の件

それぞれ上程され、事務局の説明後、各議案が承認されました。

続いて、定款に基づき、会長と常務理事が平成25年6月から平成26年1月までの職務執行状況について報告しました。

平成26年度の主な事業計画は、次のとおりです。

1) 総会、理事会の開催

通常総会 6月
理事会 5月及び2月
監査会 5月

2) 植物防疫推進事業

機関誌「協会情報」の発刊（3回）
農薬適正使用普及推進
植物防疫に関する研修会の開催

3) 農薬技術確認圃設置事業

技術確認圃の設置
成績発表及び設置検討会等の開催

4) 委託試験事業

（一社）日本植物防疫協会からの受託
（公財）日本植物調節剤研究協会受託
委託者が主催する設計検討会及び成績検討会等
に出席
委託試験に関する成績検討会、ゼミナールの開
催及び参加
委託試験結果の情報、防除技術等の発行
その他委託試験に関すること

また、平成26年度の予算は、次のとおりです。
（単位：千円）

1) 経常収益

受取会費	1,000
事業収益	32,650
受取補助金等	500
雑収益	25
計	34,175

2) 経常費用

植物防疫推進事業	405
農薬技術確認圃設置技業	850
委託試験事業	32,040
管理費	859
計	34,154
正味財産期末残高	21

当事業計画に基づき、事業推進に努めます。

○前述しましたが、平成26年度の通常総会の開催を6月に計画しています。

日時、場所等詳細は、おってご連絡しますので、会員の方、ご出席の程よろしくお願いたします。

協会情報 第97号
2014年（平成26年）2月発行
発行者 阪上日吉
編集者 市川昌平
発行所 一般社団法人和歌山県植物防疫協会
〒640-8281 和歌山市湊通丁南1-3-1
ル・シャトー真砂2階B号
電話/FAX 073-431-4190
E-mail : hiranota@cyber.ocn.ne.jp